湖畔短歌会合同歌集

あれから一年―わたしたちの震災歌集

新日本歌人協会我孫子支部

湖畔短歌会合同歌集

あれから一年ーわたしたちの震災歌集

新日本歌人協会我孫子支部

はじめに

二〇一一年三月十一日午後二時四十六分、Ｍ９の大地震が東日本を襲撃しました。私たちが住んでいる千葉県でも震度５強の揺れは激しく、家はグラグラと大きく揺れ、コップや茶碗が飛ぶように床に落ちて割れ、書棚からは本が床に散乱し、足の踏み場のない状態でした。電話も不通、都内と近郊の交通も全部ストップしました。

同じ頃、東北地方の海添い一帯に高さ十数メートルの大津波が発生し、人や街をひと呑みにし、死者も一万五千人をはるかに越えるほどの大惨事となり、広範囲にわたり壊滅状態になりました

そしてまた、大地震の影響で、東京電力の福島原発が爆発し、放射能汚染が広がり、日本中を震え上がらせました。わが住む地域も放射能のホットスポットに入り、放射線量の数値を気にしながら暮らしています。

あの日から一年、被災地の瓦礫の山は放射能に汚染されていることもあって、まだ全部撤去されていません。九死に一生を得て避難所で暮らす人たちも、放射能が心配で、住んでいた場所に戻る、戻らないで揺れているようです。

湖畔短歌会の私たちはあの日からずっと、被災地に心を寄せながら、詠い続けてきました。

休日にはボランティア活動に被災地を訪れている仲間もいます。

そして、詠わずにはいられない気持ちを、今日ここ

に、一冊の歌集として形にすることになりました。

遙かな時を超え、このページをめくるとき、私たちの生涯の中で遭遇した「東日本大震災」と人類の未来に大きな汚点を残した「原発事故」の衝撃が再び大きく甦ってくることでしょう。

表紙の三体の仏像は、陸前高田のかの一本松から作ったものです。

高田松原は昨年の三月十一日までは七万本の松があり、白砂青松の浜でした。たった一本だけ生き残った樹齢二五〇年の松は希望の象徴でしたが、この松も塩害のため寿命が限られているため、こうして、この仏像となったものです。

二〇一二年三月

新日本歌人協会　我孫子支部長

湖畔短歌会　　藤田貴佐代

青うっすらと夏が近づく　　本田幸世

ひとたびは訪れたしと思いきし松島は無惨きわまりもなき

瓦礫と泥の無音の映像続きおり取材レポーターは言葉失い

生存者の影はなきかと映像の瓦礫の下をのぞき見つめる

まざまざとうつつなりけり巨（おお）き人の吐瀉物のごとき瓦礫のみちのく

反対の声挙げざりしこと痛恨なり今原発の爆ぜて噴き出す

「原子力郷土の発展豊かな未来」と無人の町の役場の看板

助けあう暮らし生き継ぐ山峡を家族もちりぢり村人離りゆく

原子汚染の雨に籠もりて見る窓辺椿くれないくらぐら沈む

震源が東海村へ近づくに事あるときはと覚悟を決める

水道水に放射能物質検出され原発事故は暮らしにおよぶ

放射能水噴出しおり　漁師らが望みひた寄せ漁待つ海へ

わが畑に蝶々蜂の姿見えず豆の花蔓揺するは風のみ（ホットスポット）

大地震（ない）を会議の机下にしのぎおり　力熱く仲間と抱き合い（2011/3/11）

救援の駅頭募金に人々の心温とく子の一円も混じる

節電の細き灯（ひ）やわらに光る街　夜を親しく月上り来る

新茶葉の放射能汚染聞く日々に力出さねばと畑耕す

トメ強くハネは奔れる「希望」の字力はらみてわれを励ます（金澤翔子さんの字）

福島の桃を安値に求めきししっとり透きてやわき大玉

小草生え竹林起き立ち被災地に青うっすらと夏が近づく

夕宿りのムク群れさざめく木下路（こしたみち）「原発なくそう」と声を通らす

東日本大震災　藤田貴佐代

家がつぶれる予感がはしる死がよぎる音立てて家屋の凄まじき揺れ

身内への安否の電話つながらず電車の不通にさらなる不安

給油所の閉鎖が目立つガソリンも灯油もなくて地震後の街

オイルショックがかつてもあった即席麺・パン類どこの店にもなくて

地震後の街をひと呑みにする津波　情報はテレビに昼夜途絶えず

瓦礫の下にまだ生きている人あらん雪が被災の街埋めて降る

伝達を一方的に押し付ける計画停電　有無を言わせず

炉心溶解ふっ飛ぶ建屋　存外の数値を示す放射能もれ

放射能を消すシステムを未だ持たず埋めるしかない人間の知恵

戦争から始まった核の実用化　広島・長崎がまず試されて

まるで宇宙を歩く出で立ちの防護服　二時間ばかりの「一時帰宅」に

被災地に読経流れて慰霊祭　住まいの跡に花置く人ら

たわやすく瓦礫といえず壁・瓦かつては家族を守りたる家

家も消え働く場なき被災者らかけがえのない人失してなお

放射能の汚染地として世界より隔離さるるや未来の日本

風の中に土の匂いのする暮らし消えて原発の村に人無し

被災、地に生きる　桜田和子

大地震、津波と火事と放射能襲いかかりて死の街と化す

東北の流れ壊れし町々に更に雪降り耐える限界

家もなく食べ物もなく水もなく空襲あとの廃墟と同じ

繰り返す余震にさえも怯えいて津波の恐怖　体動かず

「みんな無事」ただそれだけで電話切る娘は「後ろに人続くから」と

救援の募金を入れる幼子とそれを見まもる若き父親

自転車を停めて募金の箱を見る、若者は五百円玉コトリと入れる

大根と人参じゃがいも送りし後娘の電話は「風呂に入りたい」

原発に苦しむ民の「救援」に、原子力空母の寄港は要らぬ

震災と原発事故にあえぐ中「思いやり予算」通すを許さず

牛乳を搾って捨てる農夫なりインタビューの画面に涙流れる

見られること少なきままにこの年の桜は花を散らし始める

家・家族・仕事失い被災者は何を支えに生きていくのか

流失の瓦礫の前に立ちて吹く娘のトランペット亡母に届けや

この四月子は一年生になったはず遺品を捜す母諦めず

グランドに番号のみの墓碑残る三月経つ今不明者八千

本堂の隅に並びし骨壷は番号つけられ未だ帰れず

テレビには腐臭映らず梅雨に入る瓦礫の下は何がひそむや

放射能の数値に若き母達は水に、空気に、雨に怯える

原発は要らぬとドイツ決断す日本もゼロへ署名拡がる

また霞立つことのあれかし　　大津留公彦

「東日本大震災」おどろおどろしい名は付きぬ春一番吹く
優しきニッポン
水温む日に三号機から煙立つ今年の春はいつ訪れる
焼け石に水を遣るよな水投下頑張れ頑張れとは願うなれども
陽炎は壊滅したる町の跡　いつものようにただ立って居り
考える葦の角元揺らぎけり　考えは十分足りていたのか
早蕨が萌え出ずるとき大地震　起こりてみなが優しくなりぬ
春告げ魚　眼を醒ませとや　大地震起こして日本に春は来らず
夕食はタイムシフトで作りたり余震は強く何度も続く
「ひまわり」のテーマ哭く如く沁みわたり草笛かくも心震わす
木も人も木っ端微塵となり果てぬ黙ってはおかぬ木々も人々も
温かき筍飯を届けたし動き回れぬ日常歯がゆし」
夏立つ日ボランティア焼けの弟が涙ぐむなり岩手の酒注げ

ば

苗代に種籾を蒔く人はなし季節は揺るがず進み行くなり

ミッキーの風船持ちし人優しわが通勤電車に笑顔が戻る

孫としてパンダの列に並ぶなりボランティア動くゴールデンウイーク

実朝が詠みし塩竈の浦ならばまた霞立つことのあれかし

悲しみはイブの夜に起こりたりりんご農家のリンゴ園に死す

放射線測定結果は９．９マイクロシーベルト団地の中に衝撃走る

防災訓練にかってない人の集まりぬ三月一一日鎮魂の日に

除染のスコップを置きて五人で黙祷す三月一一日あれから１年

あとがき

原子力災害という世界史上未曾有の災害を今なお産み続けている東日本大震災の発生直後に俳人の長谷川櫂さんが被災者支援の為の短詩型文学のサイトを立ち上げられた。多くの投稿があり私も短歌を投稿した。

長谷川さんは俳人だが連続して短歌を投稿された。

それが昨年の五月に「震災歌集」として歌集に纏まった。

タイミングもすこぶる早く内容も被災者への思いが溢れた素晴らしい歌集であった。

マスコミも取り上げそれを行ったのが歌人ではなく俳人であった事もあり、機会詩としての短歌の持つ可能性やその社会性を鮮やかに一般の人の目に見える形にした。

この「あれから一年ーわたしたちの「震災歌集」」はそれに触発されたものである。準備は早かったが電子出版とした事もあり発行は震災から一年目の記念日となった。

震災直後の歌が多く今となっては書き直しの余地もありますが敢えてそのまま発行します。

柏駅前の喫茶店で毎月行っている歌会から更に新しい歌が生まれていますので第二集が発行出来るかもしれません。

表紙の写真は前書きにあるように歴史に残すべき奇跡の一本松から作られた仏像です。

陸前高田市の戸羽市長のご好意により使わせて頂きました。

どなたかが買って頂けるか不明ですがこの歌集は三百円の有料の電子出版とし売上は全額陸前高田市に寄付したいと思います。

巨大天災と人災である原発事故を表現するのに私たちは多分に力量不足であります。
そしてあまりにもささやかな私たちの歌集を有料とする事への迷いがありました。
しかし敢えて有料にてここに刊行します。
そしてそれで被災された方や避難されている方への熱い連帯のエールと致します。

二〇十二年三月十一日　湖畔短歌会　大津留公彦

湖畔短歌会合同歌集

あれから一年ーわたしたちの震災歌集

２０１２年３月１１日　発行

発行者及び発行所
千葉県我孫子市中峠１６０４―８９
藤田貴佐代方
新日本歌人協会我孫子支部　湖畔短歌会
アドレス　kohantannka@yahoogroups.jp

奥付

あれから一年—わたしたちの震災歌集

http://p.booklog.jp/book/47274

著者 : ootsuru
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/ootsuru/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/47274

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/47274

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.